

溝口敦

反乱者の

魂

小説・大
塩平八郎



反乱者
魂

溝口
敦

反乱者の魂

定価 六八〇円

一九七〇年八月十五日 第一版第一刷発行

著者 溝口 敦 ◎一九七〇年

発行者 竹村 一

発行所 株式会社三一書房

東京都千代田区神田駿河台二の九

電話東京(二九一)三二三一・五番

郵便番号一〇一

振替東京八四一六〇番

印刷所 第一印刷株式会社

製本所 山本製本所

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

溝口 敦

一九四二年 東京浅草に生まれる

一九六五年 早稲田大学第一政経学部卒業

週刊誌・月刊誌記者を経て現在フリー

著書 『山口組ドキュメント・新飯血と抗争』

反乱者の魂

今、美吉屋は重い襖ふすまを閉めて引き下った。私と格之助はもうい信頼の空間に、二人だけで残される。

格之助は私に就寝の挨拶を小声で述べた。彼の場合がいな礼儀正しさは私を不快にさせ、酷薄な気分になさそう。おそらく彼は、私との対座の緊張を逃れたいのだ。意味をなさないことでもただ口にしたいのだろう。数日ぶりの寝具に旧習を思い出してというには、その間、彼も私と同様、多くの目を見すぎていた。

私は彼の儀礼を止めようとしたが、思い直し、受けた。挨拶を受けるに値しない己れという思いと、これまで一通りの敬意を捧げてきた形式に対する今になっての嫌厭は、物言いのいとわしさによって言葉にならなかった。現在の私は、何ごとにあれ、差し出されるものを受けるだけだ。

美吉屋から私たちに与えられた部屋は納戸の小間である。壁ぎわに長持、使い古しの水屋、

ござ、障子、すだれ、商売物の手拭地などが雑然と寄せられている。湿気がいくぶん、におう。ここに私たちは当然、夜具二つを敷き並べて眠る。

隣の勝手で、美吉屋の灯を吹き消す音がした。彼も目を閉ざし、災厄の夜に身を漂わせるのだ。

私は格之助が言い終えた後も、うなずいただけで凝然としていた。短い放心の時間が挟まれたろう。格之助はそういう私にならない、寝もやらず静座していた。僧体の彼の頭は青く凹凸して、彼の脳髓の困惑と混乱をそのままに示している。私の頭も彼と同じである。私の眼に、坐る格之助の姿がゆらゆらと揺らめくように映った。

私は彼に寝るように手振りし、自らも脇差を左に置き、冷え冷えとする床に身を入れた。腹這いになり、飲み残しの茶を口に含む。眠れない。

私は枕もとの行灯の灯心を一本に細め、下げ戸を落した。紙ごしのうす暗い光は、終夜私を照し、私の衿持を保ってくれよう。捕手が私たちを包囲したなら、頭陀袋だぶくろの黒色火薬に、灯心の火を点ずる。火薬は私の体を爆砕しないまでも、瞬時に私たちを火に包むにちがいない。

美吉屋は最初、灯が部屋の外にもれ、家人に気づかれては、と行灯を置くことを危ぶんだ。だが、彼は私の黙っている顔を見て、一切を、逃れられぬ彼自身の運命までも悟った気色である。いつか、私の潜伏は大阪城代や町奉行所に知られると見なければならぬ。潜伏の期間ではできるだけ長く、その状態は、捕手の機先を制する自害のための便宜をさまたげてはならぬ。

い。この安全と名誉という二つの、互いに矛盾する条件は、美吉屋の手で調える以外にない。美吉屋は一言の抗弁もなく、これらの事を理解し、私たち死神の不意の到来を甘受した。そう私はふんでいる。

大阪油掛町・美吉屋の表戸をたたいてから、すでに二時間あまりたっている。

ほとほと戸をたたく私に、ややあつて美吉屋五郎兵衛は戸の内から、どなたでしょうと問うた。備前島町・河内屋八五郎の使いです、という私の返辞に、彼は表戸の締りはずし、戸を繰り開けた。私は格之助を後に従え、有無をいわず店内に踏み入った。

そのとき、彼の牢死は、ほぼまちがいなく決つたのである。彼に将来する不本意な死は、私が彼と彼の家を隠れ家に選んだことで、いづれ正確にもたらされよう。

店内は寝静まっていた。美吉屋も休んでいたらしく、寝間着に羽織だけを重ねていた。彼は入り込んだ私たちの意外なナリ——鼠色の木綿合羽に脇差、僧形——にとまどいを見せた。彼の顧客である河内屋の手代と私たちの姿は似ても似つかない。私たちは彼の逡巡にかまわず、さらに奥に進んだ。監視の眼の飛び交う往来から一刻も早く逃れて、四囲の閉ざされた場所に潜みたかった。

美吉屋はさすがのように再び、どなたと問うた。私は振り返り、彼を見すえて、平八郎とだけ答えた。一瞬、彼の顔は痴呆のようにゆがみ、ついで伏せられた。暗がりの中での私の外見は、旧知の彼にも大塩平八郎であることを教えなかった。

彼は黙って戸を締めに戻り、私たちは奥の間に導かれた。

私はこの先、いくらも生きられまい。たとえ美吉屋の配慮と処置が万全であっても。私のわずかな延命のために、私はおそらく今、美吉屋と彼の妻子を犠牲に供したのだ。美吉屋の私への悲惨な好意に、私は永遠に報いられまい。私の現在は、庇護されることで全てを死に導くものである。

美吉屋によれば、この家には私と格之助をのぞいて十人の男女がいる。美吉屋の当主・五郎兵衛、その女房のつね、かくという女子一人を連れた出戻りの娘・かつ、下女一人、二階に眠る五人の小僧、下男。このうち私たちの潜伏を知ることになるのは、美吉屋と女房のつねに限らねばなるまい。他の者は知れば、災厄の恐しさに必ず密告しよう。

もっとも事態を直視するなら、美吉屋夫婦にも全幅の信頼は置けない。対価を求めようもない彼らの好意が気を取りなおし、密告という当然の権利を行使することは十分考えられる。私と格之助の所在を司直に告げること、それ以前に私たちを匿まった罪を帳消しにする手が彼らには残されている。私のそれへの対抗手段は、できるだけ長期の藏匿を彼に強い、密告の価値を相対的に低めることだけである。だが、一カ所に長期間潜めば、それで得られる安全と同じ割合で、彼ら以外の他者の不審を買う機会を増やすだろう。

私は美吉屋の思惑をあれこれ推し量る愚をおかさないため、彼の好意に対する感謝の念を保留しておく。つねに危険にさらされている現在の境涯は、臆病なまでの感性の狡猾を私に許す

だらう。それが積極的な何ものも私にもたらさないとしても。

美吉屋は私の祖父筋の縁家である。彼の祖は塩田氏を称し阿波藩の士であったが、没落して大阪に来、手拭地の仕入れを業とした。五郎兵衛はそれをついで美吉屋と称え、業績を伸ばして、八年前、本町筋心斎橋筋を西へ入る北側の借家から現在地を買ひ求めて移った。彼との縁戚関係は私の商人嫌いが幸いして、少数の者しか知らない。また美吉屋の女房・つねは私の妻・ゆうの姉であり、美吉屋は私の義兄にあたるが、大塩家が本家筋といった事情からもし事するのは逆に彼の方である。

しかし、いずれにしろこれらの薄い血縁が、美吉屋の行動にいつまでも掣肘を加えられるものではない。彼の今夜からの眠りは蔵匿の露見という思いに、安らかではあり得ないはずである。

六日前、私はこの大阪で挙兵し、今しがた大阪に舞いもどった。私には大阪が盲点であり、その周辺より安全という虫のよい考えも確かにある。時間の推移とともに、私を搜索する手は遠方に伸びて拡散し、かえって大阪の探查が手薄になる傾向はあろう。また、私が挙兵の地である大阪になお潜むことは大胆に過ぎて、司直の意表を完全につくことになるかもしれない。さらに私は大阪町奉行所の元与力として、大阪の地理と、あり得べき警備状況を知悉する。これらが私に有利に働く可能性はある。

しかし、私が大阪に戻った真実の理由は、私の挙兵のもたらした諸状況をつぶさに知りたい、

という一点につきる。知ってからなら、死ねる。そうした望みがなければ、私の瀕死の運命に美吉屋の人間性という、さらにもう一つの不確定な要因をつけ加えはしない。

美吉屋は私が戦闘に使用した「救民」等の旗幟を染め、調達したかどで、すでに大阪町奉行所の糺問を受け、仮処分としての町預^{あづかり}の身になっていた。彼の挙動は町の監視を受け、長旅は許されない。彼は奉行所に「拳兵計画をなんら知ることなく旗幟を製作した」で、いい抜けたというが、その小さな罪と彼にかけられた嫌疑が、全てが剣呑な大阪の街にまぎれる保護色として私に働くという考えは、きわめて魅力的である。

だが、私は現実から遊離して、物欲しげな夢を見て死にたくはないし、夢を見て死んだと人に噂されたくもない。私は、せっぱつまった悲観的情況がもののハズミで有利に転化するといった、青くさい、神頼みの観測に与したくはない。

なんなら、美吉屋を最期の地とするのは、他のどこにも行きどころがないから、といい直してもいいのだ。実際、私は大阪以外の土地に自己の生命をかけて私を預ってくれる人間関係を持たない。

私を囲繞する状況は極端に陰悪である。私は偽りの平穩の中に、まだ発動しない危険のさ中に、眼を閉じる――。

私は自伝を記そうと思う。死がまもなく私を訪ずれ、私の生にはっきりした区切りをつけようから、私の誕生からほぼその死までをも描く時期として、今は適當である。なお幸いなことに、私の四十五歳という年齢はまだ一般的に記憶の確かさを保持しており、それが自伝を書く上に、少なからざる貢献をすることと思う。

自ら選り入ったとはいえ、ここ美吉屋は牢獄に変わらない。外出の自由は四囲が許さない。あるいは、拘束は囚屋以上とさえいい得る。私の存在が他者に気づかれ、目撃されてはならないのだから。この不自由と重圧は、書くという行為に便宜と不便宜をあわせて提供しようが、いずれにしろ、書くことは残された日々の支えになるはずである。文具は当然、私の持ち合せで間に合おうし、それができれば、美吉屋から得られよう。

叙述の順はもっとも自然な形として時の流れに従いたい、ただこの直後に続く部分には、例外的に拳兵と逃避行の模様を記す。拳兵という事業を検討し、反芻したい時期に私はいる。

また大きく、私に関連する新しい情報、美吉屋等より齎されたなら、それが齎されたときとなるべく隔たらずに、文中に挿入したい。私が私の過去に非常に執着するにせよ、私の最大の関心事はいつも現在の私と、私に接触する周辺の動向だからである。加えて、それを書き入

れることは自伝の本義からはずれないと思う。

さらに、急激に私が死ぬとき、あるいは強度に身心を拘束されるとき、不本意にもこの自伝が中断されることはいうまでもない。

これを書く以上、他者に読まれることを私は望んでいる。そのために、区切りのよい章ごとに美吉屋に保存を頼むか、床下の土中に埋めるかして、できる限り後世に伝わるようつとめた

い。

私になぜ書くのかと問う人は、今、いない。が、問われたなら、その問いに答えることは私に難しい。というのは、それは必然的に挙兵の意味にかかわり、なぜ私は挙兵したかという問いの答えに関連するからである。

私の死後の後世が私たちと変らぬ卑少な人間の集合であろうとも、私は後世に、漠然とした望みを託している。仮りに、そうでないとしたなら、後世に属する見者を措定して、後世への呪いでは決してない、善意のこの文章を私は草せられない。そして書くこうとする自伝と私の生涯の結論的部分は、とりもなおさず挙兵なのである。だが、挙兵は市民や他者への善意から行なわれたと、私には断言できない。私の破壊は建設をめざさなかった。私は後世への直接的な、間接的な効果を狙って、私の同志と家人の死を布石したのではない。

それとも、私は建設的な意欲を抱きながらも、挙兵の手段・方法を根本的に誤ったのか。そうであるなら、責められるべきは私の愚かさである。私の痴愚が同志の生を誤らせたこと

になる。

私には分らない。ただ殺人者の私に許されない確かなことは、今まで書かれた自伝や回顧録の全てが必ずしもその目的を明記したわけでない、とはぐらかし、單純に消暇法である、と悟り澄ますことである。

私は爾後の叙述によってこの問いに答えるよう努めたい。が、ついに答えられずに終るかもしれない。

書くことは派生的に、私が地獄に持ち込む怨念の対象をも正確にするだろう。

第一章

挙兵前夜、私と同志は私の居宅であり、学塾である洗心洞の奥座敷で酒を酌んだ。私はこの宴に秘かに様々の目的を付した。脱落と裏切りに対する防禦、禁足による人員確保、団結と士氣の保持、不安と緊張の分かちあいと解消、生への個人的な告別など、全てはその夜が満さなければならぬ課題であった。

酒盛りは盛大に行なわれたといつてよい。それは、所詮、明日死ぬという絶望からでなく、必要な費目への計算され、多目ではあれ、制禦された出費なのだった。戦い前夜の宴としては略式だが、酒は爛をつけ、十分な肴が用意された。手あぶりとは別に、大火鉢に爛ナベがかけられ、鏡は抜かれ、銚子は乱立した。

ただ私は座なかに冷や酒の大盃をまわし、同志に結盟を再確認させた。

献酬はあちこちで行なわれたが、座は乱れず、翌夕に予定された挙兵に言及するものはなかった。わずかに少壮の松本麟太夫が、故頼山陽の七絶「不識菴、機山を撃つ図に題す」を吟じ

かかつて、私たちに類似の感慨を催させた。彼はそれを彼の同僚に叱責され、鞭声肅々夜河を過る、までで中断しなければならなかった。

格之助をのぞく私の家族——妻・ゆう、格之助の妻・みね、その子・弓太郎、養女・いくの四人と下女・りつ——はすでに十日ほど前、摂津般若寺村の庄屋・橋本忠兵衛宅に立ち退かしていた。忠兵衛は自身も挙兵に加わるために大事をとり、私の家族をさらに伊丹・伊勢町の紙屋幸五郎の家に移した。

勝手では洗心洞世話人・杉山三平が臨時雇いに采配を振って飯をたき、軍食とするムスビを五合の飯に二つあてで握り、長持五棹につめていた。かねて動員しておいた大工、人夫たちも別間で酒に酔い、胴間声がときに聞こえた。場ちがいいにも、穏和な談笑の、完結した世界の像が私に結ばれた。そのとき誰しもが挙兵を信じられず、信じる気にもなれなかった、と思う。いつしか座は沈静し、何人かが横たわり、突っ伏し、種々の姿態で酔いと眠りに身をまかせた。私は宴のあとを格之助にまかせ、書齋に退いた。書齋の四壁をおおっていた書籍は全て売却され、壁の白々とした跡が私をいっそう寒くさせた。

私はその夜を眠りたくなく、考えなくてはならない何ごとかを求めた。軍略はすでに重立った同志と練られ、新たにつけ加えるべき何ものもあり得ないように思えた。

挙兵を予定する二月十九日は、この月二度目の丁ひんざいで春の孔子祭にあたり、この日私は儒学の門弟を洗心洞に集めて聖像に蘋菜ひんさい等をお供え、孔子を祭ることを例としていた。宴に不参加の門